

『大乘四論玄義記』に関する諸問題

伊藤隆寿

はじめに

韓国における近年の考古学的発掘調査及び仏教研究の進展により、思いもよらず『大乘四論玄義記』（以下、本書）が脚光を浴びていることは、本書について三、四十年前に研究に従事していた者として大変驚くと共に、研究が新たな局面を見せていることを喜びたい。

2006年10月16日の『朝鮮日報』（日本語版）の記事を、石井公成先生より同年11月20日にいただいたが、そこに「韓国最古、三国時代百済の文献を確認」との見出しで、本書の京大本の表紙写真とともに、木浦大学歴史文化学部の崔鉉植教授の談話が掲載されていたのである。扶余の寺院跡から「宝憲寺」と書かれた木簡が発見されたのは1990年代のことのようであるが、崔教授とドイツのハンブルグ大学のブラッセン教授とは2004年ころより本書についての共同研究を開始し、新しい知見を得ていた。その第一は、本書における「耽羅」（とむら、済州島）への言及と、第二に、「宝憲寺」僧への言及とである⁽¹⁾。そして、宝憲寺が中国の寺ではなく百済の寺であることが木簡の出土によって確認され、つまり本書が中国撰述でないという有力な根拠となったのである。そして両教授は、本書の著者慧均は、百済の僧であると判断し、本書の百済撰述説を2006年10月にソウルで開催された学会で発表されたのである⁽²⁾。

私は、本書の研究、さらには韓国の仏教研究の進展に寄与した両教授の功績を評価し讃えたいと思う。その上で、百済撰述説や関連する諸問題について、従来の私の考察を踏まえながら私見を述べておきたい⁽³⁾。

1、百済撰述説と新羅撰述の可能性

そもそも日本で本書が「唐の慧均」による著書とされたことに確たる根拠はなく、奈良朝の写経の記録や経論目録には出身地の記載はない。唐・慧均と明確に記されたのは、明治時代に『大日本統蔵経』が編纂されるに際してであったと思われる⁽⁴⁾。

私は、論文での発表はしなかったが、1970年代に本書は中国撰述ではないと考えていた。その理由の第一は、巻末の識語であった。周知のことであるが、その文は次の通りである。

顯慶三年歲次戊午年（658）十二月六日興輪寺学問僧法安為大皇帝及内殿
故敬奉義章也

この識語をどのように解釈するかが重要である。私は、興輪寺を有名な新羅の寺と考え、法安を新羅僧と見て、新羅の学問僧である法安が入唐して、大皇帝すなわち唐の高宗に本書を献上したものと解釈し、本書を中国僧の作でなく新羅僧の作であろうと推察したのである。この推定は、両教授の研究がなされた現時点でも排除できないと思う。つまり新羅撰述の可能性は否定できないのではないか。

両教授は百済撰述説であるが、この識語の興輪寺を私と同じく新羅の寺とみている。しかし学問僧法安を日本からの留学僧と考え、大皇帝を日本の天皇とみることは無理ではないかと思う。この時代に日本で天皇のことを大皇帝と称した例は確認できない、皇后を内宮とはいうが内殿という呼称も確認できない。また、新羅に留学した日本僧が、百済僧の撰述した書を、唐に渡って大皇帝に奉獻するというのも甚だ不自然なことであろう。「学問僧」という呼称は、日本では「入唐学問僧」というように使用されたが、百済僧觀勒が推古10年（602）に日本に来て、彼によって日本の僧正等の制が624年に設置されたということからも、日本の律令制や僧制などは、多くを百済や新羅の制に負っている。それは扶余の発掘調査からも推察されている。つまり、寺学問僧という呼称は、新羅や百済でも用いられていたのではなかろうか。その場合に「興輪寺学問僧」というのは、興輪寺の入唐学問僧の意味ではないであろうか。

それで、この識語の事実を、歴史書等によって確認することができないであろうかと思い調べてみたのであるが、私には確認することが出来なかったのである。たとえば『三国史記』を見ると、顯慶3年に唐に朝貢した記録は三国共にない。ただし、日本の記録（『日本書紀』26）によると、この年（齊明天皇4年、658）7月に、新羅にあった日本僧智通と智達の二人が天皇の勅を奉じて入唐して、共に玄奘の許で学んだという。この二人は日本に帰って玄奘の仏教を伝えたが、日本への法相宗第二伝とされている。しかし、この記事に皇帝

への献上のことは記されず、法安の名もないのである。この年以前の記録としては、百済は651と652年に唐に遣使し、新羅は650年から656年まで毎年使者を派遣している。『三国史記』による限り、当時は百済よりも新羅が唐に対して頻繁に使者を送り親密である。百済は660年に唐と新羅によって唐に降伏し、663年に滅亡する。この切迫した状況において記録はないが658年に百済が唐に遣使した可能性は考える。いずれにしても顕慶3年の本書の大皇帝への奉獻があったとすれば、対唐政策と関係しているのではなからうか。

また、この識語は、いずれの時点で記入されたのであろうか。大皇帝に献上する際に書かれたのであろうか。それとも本書を流布するに際して、献上後に書かれたのであろうか。どこで書かれたのであろうか。日本に伝えられた中国・朝鮮半島の仏教書で、このような識語を有するのは本書が唯一であり特異である。私は今、いずれであるかを判断する根拠を見出していない。

次に、両教授は本書が百済で撰述されたとする根拠に「耽羅」への言及を挙げた。しかし耽羅は中国（『隋書』に耽牟羅）でも日本（『日本書紀』に耽羅、枕弥多礼・とむたれ）でもよく知られていたため、百済のみならず新羅の人も使用しうるのであろう。それに、耽羅は500年代から百済に属していたと考えられるが、属国の耽羅を百済僧が率下するであろうか。なお、本書の耽羅の後に判読不明の文字が記されているが、私は日本での読みを挿入したのではないかと思う。そこで不明の三文字を「刀牟利」または「刀牟礼」と推定したい。また宝憲寺は百済の寺であるとしても、淵師が当時名の知られた人であろうから、新羅にも学説が知られていた可能性があろう。祇洹寺も百済の寺であることが確認できるであろうか。両者とも百済僧であったとしても、この二点のみで百済撰述と断定してよいであろうか。私は興輪寺が百済の寺であることが何らかの確実な証拠によって証明できれば、本書の百済撰述説は確定できると考えるが、現時点では新羅での撰述の可能性を排除できないと思うのである。

さて、日本での書写の記録には、本書の著者のことを「均僧正」「均正」と書き、本書にも「均正撰記」「均正撰」とあり、後に触れる『弥勒経遊意』の写本にも「均僧正撰」とある。均正は、慧均僧正の略称とされる。これも確証がない。書写の記録に僧官としての職名を付す例は、奈良朝までの書写文献に例がない。600年代の新羅は僧統制であったとされ、百済はそれ以前から僧正の制があったという。これを根拠とすれば、慧均は陳・隋代のころに中国に留学して百済に帰国し、著作に従事し、また僧正にも任じられたのであろうか。

この点と識語の興輪寺が百済の寺で、学問僧法安も百済僧であることが何らかの文献資料で確認できれば、本書が百済僧慧均の著であることが、認められるであろう。なお、学問僧法安が日本僧であることは、今のところ確認できない。

2、原題について

本書の日本での書写の記録での題名は次の通りである。（石田茂作『写経より見たる奈良朝仏教の研究』付録、参照）

1	均章	12巻		天平12年(740)
2	大乘四論玄義記第九	1巻		天平13年(741)
3	大乘四論玄義記	12巻	均僧正撰	天平16年(744)
4	大乘三論玄義記	1巻		天平17年(745)
5	大乘四論義記	12巻		天平19年(747)
6	十二均章	12巻		天平19年(747)
7	三論広章	12巻	均正撰	景雲2年(768)
8	無依無得大乘四論玄義記	12巻		景雲2年(768)
9	大乘四論義記	12巻	均僧正	不詳

また、現存する本書に記されている題名（原本に存在したと考えられるもの）は、次の通りである。

1	大乘四論玄義記巻第一	均正撰記	(初章中仮義・首題)
2	大乘三論玄義記巻第五		(統蔵経巻2)
3	大乘三論感応義第四		(統蔵経巻6)
4	無依無得大乘四論玄義記	均正撰	(統蔵経巻10)

以上のように、題目と記録が一定しておらず、原題を確定するのは困難に見えるが、慧均の思想的立場（伊2論文）、つまり本書の内容や強調される点などを考慮すると、具名は「無依無得大乘四論玄義記」で、他は略称であると思われる。理由の第一は、「無依無得」の語は本書で多用されるもので、慧均の思想的立場を端的に表明するものであること。第二に、「四論」は、『中論』・『百論』・『十二門論』の三論に『大智度論』を加えた四論の意味と考えられ

ること。慧均は、江南の三論学を学ぶ前に、『成実論』を深く学び、毘曇学や地論撰論学にも通じていて、法朗門下として恐らく同学の吉蔵とは、その学風や立場を異にしている。慧均は明らかに吉蔵を知り、かつ意識しており、むしろ『大智度論』も重視する四論学に至るの立場を置こうとしたのではなからうか。「初章中仮義」（伊2論文）の冒頭に見られる慧均の経歴から推察すると北地の四論宗との接点も想定される。また、慧均は本書の第一巻に「初章中仮義」を置いているように、吉蔵が同じ三論学者ながらも批判した「中仮師」の立場に近いと思われる。なお、題名の四論は、慧均が批判対象としている「地撰両論、成毘二家」の四論のことではない。

3、本書の影響

『四論玄義』は、中国・朝鮮半島・日本の仏教界に大きな影響を及ぼしたと思われるが、その実態の解明は今後の課題である。

中国での影響が確実なのは、『道教義枢』の成立に本書が参照されていることである。『義枢』の五種道性説の形成に三論学の五種仏性説が依用されたことは、鎌田茂雄『中国仏教思想史研究』（1968年、春秋社）に明らかであるが、さらに『義枢』巻10「感応義第三十六」の「無情有情感応有四句」は本書と同説である。したがって、仏性説の影響についても、吉蔵の書も参照しつつ本書を基本的に依用している可能性もあり、改めて比較検討する必要がある。また、天台の『法華玄義』巻6上の「第六明感応妙者」（大正33、746下）以下の部分との関連性もある。

半島では、新羅・元暁『涅槃宗要』「第二明仏性義」に本書の仏性義が参照されていることが明らかとなっているが（鎌田茂雄「釈華嚴教分記円通鈔の注釈的研究（三）之二」、『東洋文化研究所紀要』第95冊所収。注記223。1984年11月）、この注記は駒澤大学の吉津宜英博士の作成に依るものであり、私はこの事を論文として発表される前年（1983）に吉津博士よりご教示いただいたのである。その外にも、半島の著作に本書が影響を与えている可能性があるが、それは今後の精査に俟ちたい。

次に日本においては、仏教が伝えられたのが半島からであり、しかも三論学や成実学が最初に伝えられた（伊20論文）。日本では吉蔵の三論学が主流になったとはいえ、本書は吉蔵の著書と同時期に伝わっていて、しかも先に示したように、本書が9回にわたり（その間28年）繰り返し筆写されていることは、

日本に伝えられた仏典全体を見ても例がない。いかに重要視されたかを示すものであろう。日本三論宗は、12～13世紀に復興して吉蔵の著書を中心に読まれたが、その解釈及び注釈に際し本書が重んじられた。すでに本書の引用文(逸文)を収集整理した通りである。特に本書の記述を根拠として形成されたのが、三論宗の学系(師資の系譜)説である(伊¹⁹, 21, 22)。本書には撰山三論学派の歴史に関する記述が多く、吉蔵よりも詳しく述べている。これは、入唐学問僧としての慧均の自覚、中国での見聞を出来るだけ記録しておこうという意識の表れではないであろうか。『起信論』の成立についての伝聞もそうである。僧伝などには記載のない人を含めて、法朗の門下生の主要なる人々を24人も数えているというのは(伊⁹論文) 実際に法朗門下で学んだ者でなければ書くことはできないであろう。そのような中国三論学派の系譜に関して、ここで特に注意しておきたいのは、撰山三論学派の第一祖についてである。吉蔵は「撰山大師」「大朗法師」と呼んで一度も名前を記さない。しかし慧均は、現存の本書中においても、本書の引用文(逸文)においても一貫して「道朗」としている。道朗が高句麗出身であることは周知の通りである。この慧均の記述が根拠となって、日本において撰山三論学派の第一祖を「道朗」とする説が定着したのである。それに対して近代の仏教学者は、『高僧伝』巻8の法度伝と陳・江総持『棲霞寺碑文』によって、道朗というのは「僧朗」の誤りであるとした⁽⁵⁾。その説が日本で認められ、私も以前疑問に思いながらも僧朗説に従ったところもあるが、改めて考えて見ると、法朗門下で親しく学んだ慧均が自分より三代前の三論学派の鼻祖たる人物の名前を誤り伝えるであろうか、という思いが強い。法度伝は確かに僧朗と記しているが、『碑文』該当文は「先有名徳僧、朗法師」と読むこともできよう。慧均の伝承を信ずれば、日本での伝統説たる「道朗」が正しいということになる⁽⁶⁾。

さらに、本書は『大乘玄論』及び『大品遊意』の成立に関係しているが、以下に要点のみ述べておきたい。

4、『大乘玄論』について

すでに明らかになっているように⁽⁷⁾、『大乘玄論』の「八不義」が本書の「八不義」と同一であることと、「八不義」中の「第五弁単複中仮義」と「二諦義」の「明中道第二」中の「第二就二諦明中道」とが、やはり同一内容であり、比較すると「八不義」が詳しく、「二諦義」が略となっている。この事実は現

在の『大乘玄論』が吉蔵の書いたものではない、ということを示すものである。その外、「仏性義」も本書を参照していることが明らかである。後代に編纂された可能性が高く、製作地は中国ではなく韓国が日本と思われる。したがって、私は『大乘玄論』を一次資料として吉蔵の思想を論じることは避けるべきと考えている。しかし、私は現在製作地について、そのいずれであるかを判断する根拠を見出していない。

5、『大品遊意』について

本『遊意』が、吉蔵の著ではなく慧均の書であろうことは、すでに考察を加えた（伊13、14、15）。主要な根拠を列挙すると次のようである。

- 1、撰号がないこと。
- 2、内題に「般若義有五重」とあること。
- 3、『四論玄義』と『弥勒経遊意』との共通点があること。
- 4、吉蔵との相違点があること。
- 5、『四論玄義』にある「断伏羲」を指示すること。
- 6、『四論玄義』に「見般若義中説」とあるが、その内容が本『遊意』と一致すること。
- 7、用語に共通性があること。

以上の諸点から、私は慧均の書と見たのであるが、再考するに、これは『四論玄義』の「般若義」に相当し、日本において「般若義」を独立させて『大品遊意』として編纂流布したものと推定する。

なお、論拠3に挙げた『弥勒経遊意』の正しい題目は『弥勒上下経遊意十重』である。すでに「均僧正撰」の撰号を有する筆写本が存在するので、これが慧均の著であることは疑問の余地がない（伊16、17）。

他に、『涅槃経遊意』や崔教授が指摘された『維摩経略疏』など、吉蔵の著とされているものについて誤伝の可能性があり、更に検討の必要がある。

結 語

以上、私が1969年から1980年代に研究した成果の要点を整理し、合わせて最新の学説 崔教授やブラッセン教授の研究成果に対する、現時点での見解と問題点を述べた。少なくとも慧均は中国の学僧でないことは明白となり、著書も『四論玄義』だけではなく、『弥勒上下経遊意』と『大品遊意』（「般若義」）

も彼の著書と認められる。したがって、先ず第一に確定すべきことは、慧均が百済僧なのか新羅僧なのかという点であろう。

今後、慧均に関する総合的な研究を進めることによって、古代の朝鮮半島の仏教学の実態が明らかとなり、また中国・半島・日本の文化交流についても、さらなる研究の成果を期待したい。

付記 この論文は、2009年2月28日に韓国金剛大学仏教文化研究所主催のシンポジウム「『大乘四論玄義記』とその周辺」において発表した(論文参加)原稿に「はじめに」と注記などの加筆を加えたものである。なお、シンポジウムでの諸氏の発表内容は、同研究所発行のCritical Review for Buddhist Studies(原題ハングル)vol.5(2009.6月)に収録された。

注記

- (1) 崔教授の研究の経過については、『駒澤大学仏教学部論集』第三十九号、2008年10月に掲載された同教授の講演録「『大乘四論玄義記』と百済仏教」参照。
- (2) 2006年10月20日に、韓国史学会と木浦大学人文科学研究所の共催による「百済の僧慧均と『大乘四論玄義記』の再発見」というテーマでの学会で、崔教授は「『大乘四論玄義記』の撰述地域と撰者に対する再検討」(原題ハングル)と題して、またJoerg. Plassen教授は、“On the significance of the Taesung saron hyonui ki(大乘四論玄義記) for research on early Korean Buddhist thought”と題して発表された。その後、崔教授の発表内容は「百済撰述文献としての『大乘四論玄義記』」というタイトルで、ブラッセン教授の論文は同じタイトルで、『韓国史研究』136号(2007)に掲載された。なお、百済撰述説に対する韓国での反論は、注1の崔教授の論文参照。両教授の論文が『韓国史研究』136号に掲載されたことは、金剛大学仏教文化研究所の山口弘江氏のご教示による。ここに感謝の意を表したい。
- (3) テーマに関する拙論を提示しておきたい。本論中では(伊1)等として示す。

1	慧均『大乘四論玄義』について	『印度学仏教学研究』18-1号	1969
2	『大乘四論玄義』の構成と基本的立場	『駒澤大学仏教学部論集』2号	1971
3	慧均『大乘四論玄義』について(2)	『印度学仏教学研究』20-2号	1972
4	四論玄義の仏性説	『印度学仏教学研究』21-1号	1972
5	四論玄義仏性義の考察	『駒澤大学仏教学部研究紀要』31号	1973
6	三論教学における初章中仮義(上)	『駒澤大学仏教学部研究紀要』32号	1974
7	三論教学における初章中仮義(中)	『駒澤大学仏教学部研究紀要』33号	1975

8	三論教学における初章中仮義（下）	『駒澤大学仏教学部研究紀要』34号	1976
9	『大乘四論玄義』逸文の整理	『駒澤大学仏教学部論集』5号	1974
10	『大乘玄論』八不義の真偽問題	『印度学仏教学研究』19-2号	1971
11	『大乘玄論』八不義の真偽問題（2）	『駒澤大学仏教学部論集』3号	1972
12	『弥勒経遊意』の疑問点	『駒澤大学仏教学部論集』4号	1973
13	弥勒経遊意と大品経遊意	『印度学仏教学研究』22-2号	1974
14	大品遊意考 構成及び引用経論等に関して	『曹洞宗研究員研究生研究紀要』7号	1974
15	大品遊意考（続） 経題釈を中心に	『駒澤大学仏教学部論集』6号	1975
16	宝生院蔵『弥勒上下経遊意十重』について	『印度学仏教学研究』25-2号	1977
17	慧均撰『弥勒上下経遊意』の出現をめぐって 付、宝生院本の翻印	『駒澤大学仏教学部研究紀要』35号	1977
18	安澄の引用せる諸注釈書の研究	『駒澤大学仏教学部論集』8号	1977
19	三論宗学系史に関する伝統説の成立 特に中国三論学派について	『駒澤大学仏教学部研究紀要』36号	1978
20	我国への三論宗の伝来と受容	『曹洞宗研究員研究生研究紀要』10号	1978
21	香山宗撰『大乘三論師資伝』について	『印度学仏教学研究』27-2号	1979
22	香山宗撰『大乘三論師資伝』	『駒澤大学仏教学部論集』12号	1981

(4) 写経の記録は、石田茂作『写経より見たる奈良朝仏教の研究』を参照。本書の記載は後述。

(5) 境野黄洋『支那仏教史講話』下巻52頁、『支那仏教精史』405頁参照。

(6) プラッセン教授は、2005年の論文では道朗として論文を書かれ、その中で韓国の鄭寅普『朝鮮史研究』（1947）が、僧朗は僧道朗の略称ではないかと推定している説に触れている。

“ Sung Tonang (僧 道朗) (a. k. a. Sungnang (僧朗) fl. 476? - 512) from Koguryo and his Role in Chinese San-Lun”, International Journal of Buddhist thought and Culture, February 2005, Vol.5, pp.165-198

(7) 三桐慈海「慧均撰四論玄義八不義について（一） 大乘玄論八不義との比較対照」（『仏教学セミナー』12、1970年10月）、同「大乘玄論の八不義 慧均撰八不義について（2）」（『仏教学セミナー』17、1973年5月）及び伊10, 11論文参照。

（2009年6月28日加筆修訂 8月23日初校時再加筆）